

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 5 月 28 日現在

機関番号：17701

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2012～2013

課題番号：24730659

研究課題名(和文)日本語リテラシーを育成する学士課程カリキュラムの開発

研究課題名(英文) Study on the Development of University Undergraduate Curriculum focused on the Japanese Literacy Education

研究代表者

伊藤 奈賀子 (ITO, Nagako)

鹿児島大学・教育センター・准教授

研究者番号：10387459

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,000,000円、(間接経費) 300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、日本語リテラシー教育に注目して、体系的学士課程カリキュラム構築に向けた示唆を得ることである。日本語リテラシーに注目する意義は、日本語リテラシーが学部横断的なアカデミズムの汎用的能力である一方、その育成を目的とした授業実践のみが重視される傾向があることである。

調査の結果、評価指標を明らかにした上で日本語リテラシーに関する到達目標を大学の教育目標として明確に位置付けている例は管見の限り見られなかった。その原因として、「学士」に必要な日本語リテラシーの水準が定まっていなことが挙げられる。そのため、体系的学士課程カリキュラム構築には教養教育・一般教育の達成度の明確化が必要である。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study is to obtain suggestions for the systematic undergraduate university curriculum, focused on the Japanese literacy education. Significances of the Japanese literacy education are followings. 1. Japanese literacy or language literacy is a generic capability for academism, so every university student must acquire it. 2. Despite the above-mentioned, a lot of universities consider that it is to be sufficient only to set the class named "Japanese literacy". A result of my investigation, few universities place the Japanese literacy education in the curriculum with the clear goals and the strict criteria. As the cause, the achievement of the Japanese literacy is not fixed as the requirements of bachelor degree. This fact suggests that the clarification of the achievement of liberal arts education or general education is necessary for the systematic undergraduate curriculum construction.

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学

キーワード：カリキュラム論

1. 研究開始当初の背景

近年、大学(学士課程)において、各々の教育目標達成に向けた体系的カリキュラムの構築と、それに基づく教育の実現が叫ばれてきた。

また一方では、日本語リテラシーの育成を目指した実践が拡大してきた。その中心的な方法は、日本語リテラシー教育のための科目を設置し、能力育成を図るものであった。しかし、この科目をめぐっては、大きく3つの問題が存在していた。

第一に、科目の役割に対する過大な期待があった。日本語リテラシー科目は学生が履修する多くの科目のうちの一つにすぎず、学生は他にも数多くの学修の場を有する。そうした中、この科目だけで十分な日本語リテラシーの育成が達成できるわけではない。また、仮にその科目において十分な成果を挙げることができたとしても、その成果が他の科目においても活用される保証はない。日本語リテラシーに関する統一的な評価指標や水準が設定されなければ、カリキュラム全体として能力の育成を図ることにはならない。現段階においてはこのような視点が不十分であった。

第二に、科目において扱うべき教育内容精選の不充分さである。多くの大学が実践を行うに至った背景にあるのは、学生の日本語リテラシー不足に対する教員の危機感や問題意識である。しかし、大学の状況や教員の立場、専門分野によって問題の所在には違いがある。単一の科目で懸念される内容すべてを扱うことには無理があり、具体的な成果を挙げるには、科目を通じて教育を行う内容をあらかじめ精選する必要がある。学生の実情に対する問題意識は重要であるが、それだけで教育内容を定めることは対症療法にしかない。むしろ、現状を踏まえつつ科目の目標を設定し、その達成に向けて内容を精査することが必要だったのではない。

第三に、目標の不明確さである。日本語リテラシー科目が開設され始めた1990年代においては、この科目の目的は大学での学修を円滑に行うための基盤形成であった。しかし、必ずしも、その際達成すべき目標とはどのようなものが具体的な評価指標の形で明確にされたうえで実践が行われてきたわけではない。大学における学修の基盤形成の一環として日本語リテラシー教育が位置付けられるのであれば、求められる要素を具体的な評価指標として示し、その学修成果を評価することが必要なのではないか。また、体系的カリキュラムに基づく教育目標達成型の教育活動に対する関心が高まる中、日本語リテラシー教育の課題は大学での学修の基盤形成だけで良いのかという点にも課題がある。むしろ、学士に求められる日本語リテラシーを明確にし、その育成の基礎段階に配置される日本語リテラシー科目ではどのような目標・内容の設定が適切であるか、という観点

から科目のあり方を検討する必要があった。

これら3点の問題はいずれの実践にも一定程度共通して見られるものであった。しかし、これらを俯瞰的にみる理論は確立されてこなかった。

また、こうした問題は日本語リテラシーに限らず、大学に求められている様々な汎用的能力の育成に関して共通して見られるものである。さらに、汎用的能力以外にも、キャリア教育等、大学教育において新たに組み込まれるようになった分野にも同様の問題が存在する。こうしたことから、体系的カリキュラム構築とそれに基づく教育の実現は現代の大学教育における緊急の課題であったといえる。

2. 研究の目的

本研究は、日本語リテラシー教育に焦点を当て、大学、特に学士課程における体系的カリキュラム構築とそれに基づく教育の実現に関する課題の解決に向けた示唆を得ようとするものであった。

上述のように、大学における日本語リテラシー教育は様々な問題が明らかにされているにもかかわらず、俯瞰的な理論やカリキュラムのモデルが確立できていない状況にあった。

また、我が国の大学教育においてその学修成果向上に向けた体系的カリキュラムの構築とそれに基づく教育の重要性が指摘されているにもかかわらず、日本語リテラシー教育はその中に充分位置付けられているとは言い難い状況であった。様々な教育実践が行われているものの、それらが体系的カリキュラムのどこに位置付けるべきものであるかといった議論は乏しい。そして、日本語リテラシーに関して、学士に求められる学修成果やその評価指標の整備が進んでいるとも言い難い。

日本語リテラシーは、専門分野を越えて、大学のアカデミズムの基盤となるべき汎用的能力のひとつである。にもかかわらず、その達成目標や評価指標の開発が進んでいないまま実践だけが繰り返されている状況は望ましいものではない。

そこで、本研究においては、日本語リテラシーを題材とし、体系的カリキュラム構築に当たっての検討課題を明らかにし、カリキュラム・モデルの開発を試みた。体系的カリキュラムを通して行う能力育成はその重要性が指摘されているものの、その具体的な在り方については試行錯誤の段階にある。カリキュラム全体を通じて能力の育成を図る際の要点を明らかにし、カリキュラム・モデルを開発することにより、これまで独立的に行われてきた様々な実践の改善が期待できる。また、これまで充分に行われてこなかった大学カリキュラム研究の進展にも寄与することができると考えられた。

3. 研究の方法

本研究では、まず、日本語リテラシー教育に関する実践論文や各大学の web 掲載情報などを利用し、日本語リテラシー教育の現状についての把握を試みた。特に、中心的な実践の場である日本語リテラシー科目の内容についてはシラバスやテキスト等も参考にした。それにより、日本語リテラシー科目の類型を確立した。

体系的カリキュラムとの関係については、日本語リテラシー教育を行っている大学の教育目標と照らし合わせることにより、日本語リテラシー教育が教育目標達成に至る過程にどのように位置付けられているかを明らかにした。これについては実践論文でもあまり取り上げられておらず資料そのものが限られたが、各大学の web 掲載情報を中心にして明らかにした。

以上を踏まえて日本語リテラシー科目のカリキュラム内における位置づけを整理し、カリキュラム・モデルの構築を試みた。

4. 研究成果

まず、日本語リテラシー科目の類型については、仮説が検証され、下記の通りに確立された。

- a. 補習教育型
- b. 自己探求型
- c. 論文様式修得型
- d. 学修技術複合修得型
- e. 総合的言語活用能力修得型

a は大学での学修の基盤として必要な日本語リテラシーのレベルに達していない学生を対象とした実践であり、語彙・表現の修得を目指すものである。飽くまで補習段階に留まるものであるため、こうした取り組みのみで大学での学修を円滑に行えるようになるものではない。その点では、学士を養成するカリキュラム内に位置付けられるべきものかどうかには疑問の余地がある。むしろ、入学前教育等において扱うべき内容が授業という形になっているともいえる。

b は、自己探求の手段のひとつとして書いたり話したりする活動が用いられているものであり、日本語リテラシー向上そのものが目標とはいえない取り組みである。ただし、書いた文章や話した内容が自己探求の程度を評価する素材ともなることから、日本語リテラシーの向上も副次的な目標となっていると見ることもできる。こうした取り組みについては、特に初年次教育の一環としてカリキュラム内に位置付けられている事例が多く、学修意欲の向上に寄与している側面が指摘できる。しかし、学士としての達成目標との関係や他科目との関係等、曖昧な部分も多く、体系的なカリキュラムの中に充分位置付けられているとは言い難い。

c~e はいずれも大学での学修の基礎とし

て必要な内容の修得を目指すものであり、その点ではいずれも体系的カリキュラムの基盤に位置付けられうるものである。c は大学での学修において頻繁に求められる論文やレポートの型の修得を目指すもの、d は情報検索等の学修技術のひとつとして書く活動が含まれるもの、e は読む・書く・聴く・話すという言語活動の4領域全ての向上を目指すものである。それぞれ日本語リテラシーの中でも特にどの側面に重点を置くかによって類型化された。

これらが体系的なカリキュラムの基盤として機能するには、扱われる内容が他の科目においても活用・応用されることが求められる。そうした他科目との連携があつて初めて、日本語リテラシー科目は体系的カリキュラムに位置付けられるといえる。

こうした知見を踏まえつつ、各大学の教育目標との関係について各大学の状況の調査を試みたところ、日本語リテラシーに関する達成目標を、その評価指標を明確にした上で大学の教育目標として明確に位置付けられている例は管見の限り見られなかった。このため、各大学の取組が教育目標の達成に向けて構築された体系的カリキュラムに位置付けられているかを明らかにすることはできなかった。また、科目間の連携がどのようなかについても見ることはできなかった。こうした結果の原因は以下の2つであると考えられる。

①そもそも育成すべき学士像が明確でないため、「学士」に必要な日本語リテラシーの水準を確定できない

②学士像が明確であってもそこに日本語リテラシーが適切に位置付けられていない

日本語リテラシーは専門分野に依らず大学のアカデミズムにおいて求められる基本的な汎用的能力のひとつである。しかし、現時点においては、大学教育全体を通じて要請すべき学士像の中に充分位置付けられているとは言い難い。さらには、そもそも学士像が明確にされているとも言い難い状況にあることが明らかになった。

日本語リテラシーは汎用性を持つものであることから、特に教養教育・一般教育においてその達成度を明確にする必要がある。そして、カリキュラム全体として育成を図るために各科目において扱うべき教育内容や評価指標の開発を早急に進める必要がある。日本語リテラシーを育成する学士課程カリキュラムとは、その学修成果の評価をも体系的に行うことのできるカリキュラムであることが求められるといえる。教養教育・一般教育と専門教育との往還的学修を通じて明確な目標の達成が求められる現代我が国の大学教育カリキュラムに関しては、専門教育の知識内容をひとつの柱としつつ、それに寄り添う教養教育・一般教育との往還的学修を通

じて日本語リテラシーの向上を図り、随時その達成度を評価することが必要である。その際、育成すべき学士像の中に具体的な日本語リテラシーの評価指標や水準を前もって定めておくことが前提となるのである。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 1 件)

①伊藤奈賀子「大学における体系的なライティング教育の課題」『名古屋高等教育研究』第 14 号、2014 年、pp.117-138、査読あり

〔学会発表〕(計 3 件)

①伊藤奈賀子「日本語リテラシーの構成要素とその評価—専門職学位課程のカリキュラムに注目して—」日本高等教育学会、2013 年 5 月 25 日、広島大学

②伊藤奈賀子「汎用的技能を育成するカリキュラム・デザイン」九州地区大学一般教育研究会、2013 年 9 月 6 日、琉球大学

③伊藤奈賀子「大学における日本語リテラシー教育の成立過程」日本教育社会学会、2013 年 9 月 21 日、埼玉大学

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

○出願状況 (計 0 件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

出願年月日：

国内外の別：

○取得状況 (計 0 件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

取得年月日：

国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究代表者

伊藤 奈賀子 (ITO Nagako) 鹿児島大学
教育センター 准教授

研究者番号：10387459

(2)研究分担者

なし ()

研究者番号：

(3)連携研究者

なし ()

研究者番号：